伊賀市教育研究センター
研修ニュース
令和６年９月５日　第４５２号

〒518-0814　三重県伊賀市上友生 785 番地
TEL&FAX：0595（21）8839　　E-Mail：iga-ken@iga.ed.jp

研修講座　算数・数学
「算数授業を左右する教師の判断力」
【講師】　筑波大学附属小学校　森本隆史先生

８月２３日（金）、筑波大学附属小学校の森本隆史先生をお迎えし、「算数授業を左右する教師の判断力」と題して、ご講義いただきました。

初めに、大切にしたい授業観として、子どもから「やる気」「考え」「表現」「わからなさ」「迷い」「本気さ」「かかわり合い」「やさしさ」「感動」「笑顔」を引き出すことを大切にすること、そのためにできることを考えることが重要であることを確認しました。

次に、協働的な学びを支える３つの段階についてご指導いただきました。

第１段階は、子ども同士が互いに聴く関係をつくることです。聴く姿勢などの聴き方（形式）を指導するのではなく、気持ちを互いに通わせることで子ども同士をつないでいくことが大切であることを学びました。

第２段階は、情動的共感（心による理解）がある子ども・集団を育てることです。この段階では、「分かっていない子ども」「困っている子ども」を大切にすることです。そのために、教師は「どの対象の子どもに話しかけているのか」「自分が使っている言葉に、どんな子どもが反応しているのか」を考える必要があること、つまり、言葉を選ぶことで子どもが考える機会を増やすことが大切であることを学びました。

第３段階は、認知的共感（頭による理解）がある子ども・集団を育てることです。この段階では、考えをなかまに伝える時にどこに着目しているのか、話し手に意識させることです。意識させるためには、教師の提示の仕方や問い方が重要になってくることが分かりました。

わたしたちは、授業中に何気なく「分かった？」「できた？」などという言葉を子どもたちに発していないでしょうか。以前分からない子どもが分かったかどうか確認したいという気持ちで使っていました。しかし、それ

では結果的に分かった子、できた子だけで授業が進み、対話が生まれない状況をつくっていました。そうではなく、「難しかった？」「今のどうだった？」「先生もよく分からなかったなあ。」などと投げかけることで分からなかった子どもが分からないと言えることが結果的に対話を生んでいくことにつながることを学びました。

アンケートより【一部抜粋】

・授業前、授業中で私たちはたくさんの判断をしているのだと感じました。その１つ１つがどの対象の子どもに向かって発したことかを意識することは難しいかもしれませんが、繰り返し続けることで子どもたちの力がつくことはもちろん、教師の力もつくだろうと感じました。子どもたちがどう考えるか、子どもたちにどう見えるかということを意識して、授業中や授業前の判断の引き出しを増やしていきたいです。（小）

・「困っている生徒になんとか力をつけたい」と思い、日々授業をしてきましたが、分かっている生徒の意見をとりあげて、授業を進めてしまっていたのではないかと振り返ることにつながりました。「気づいていない生徒」をどう学習の土台に乗せていくか、教師の言葉がけひとつで変わってくると思いました。2学期の授業づくりに活かしていきたいです。（中）